小學新讀本

笠間益三編輯

卷六

大日本教育會書籍館
二五函
一七號
二架
八册

60
554

K120.8
3a
6

K120.8
3a
6

笠間益三編輯

版權所有

小學新讀本

東京　杉本氏藏版

小學新讀本卷之六

笠間益三編輯

第一

人ハ身體健康ならざれど學問を勉むること能ハず㊀たとひ如何かる幸福を得べき事業眼前ふ𠀋るを身體弱き者ればこを遂ぐるを能ハぢ〇されど健康ハ幸福を生むの母なりとは謂ふか

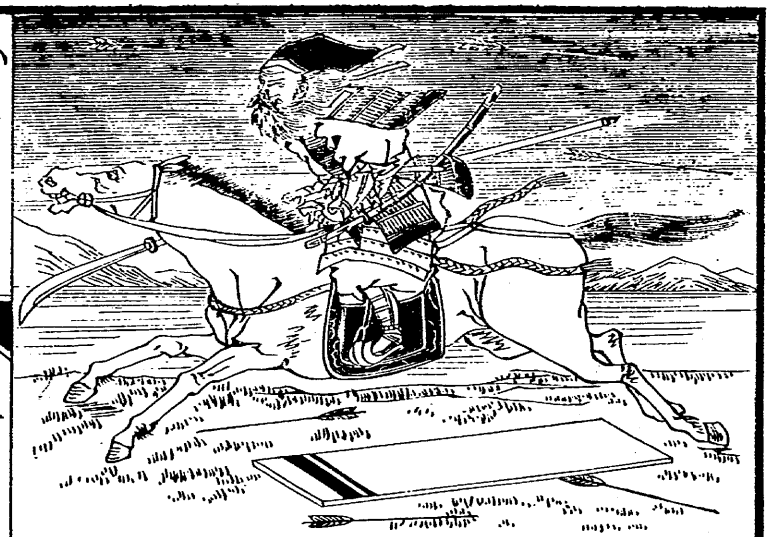
り○茲に老人あり髪も白く腰はかゞみ杖をつきて行くを見れば七十以上の齢なるべし○此老人も昔は身體すこやかにして奔走を自在なりしが今八年老いて歩行不自由ふかれども○きれども斯く身ふ

病ある模樣も形く人ふ扶けられぎ志て徐ふ歩むを見ればいとけなき時より養生よき人なりしるべし○誰ふても無病ふして長く命を保たんとを思ハゞ幼年の時より養生を善せざるべからず

第二

人々年老いたりとも強勉の勇氣を

ドく可らば　此世ハ何らん限りは國家れた絶ハ力をたゞして夫〳〵此事業ハ爲をべし○昔平家の時代ハ齋藤實盛といへる武士ありしが年既に老いて髯も髮も皆白くなれを　然れども固より勇士ハれれど常に壯士をひきゐて戰陣ハ臨めり○後ハ平家の軍勢木曾義仲と戰ひし時實盛おもへらを



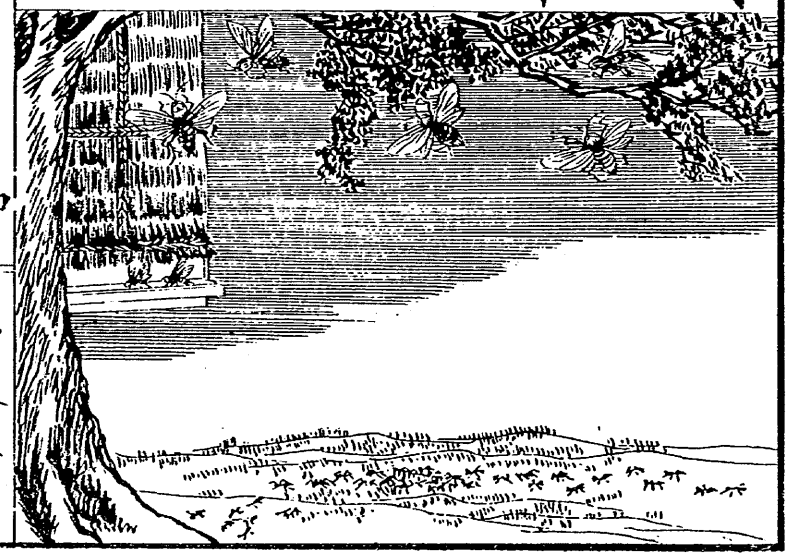
我老人かりとて敵人ハ侮らるんこと口惜しと　爰ハ於て白き髯髮ハ墨をて黑くなを絶故らに壯者の裝をなして出立ち終ハ花〻しく戰ひて討死し勇

名ゑ後世まで残す事○をれを人皆老ても勇氣をくじかぬやう少き時より心がくべし

第三

虫類の中最勉強をるもの也を蟻と蜜蜂なり　中まを蜜蜂を蜜をかもして世まを益を與ふること多し○蟻ハ忍耐の力まを富み且遠きおもんぱかりのある虫

なり　常まを土中或ハ朽たる木材等の中まをみ千万の群を形せり　春夏の候まを至り日々諸方まを出でゝ食物をを集め之を埜中まを貯へて以て冬日の用



ふ供を　其東西ふ奔走して若し食物をさがし得たる時ハ力を極めて之を埋中まもたび入れんとを　其時もた己の力ふまかせぎるとなれを能く其物を見とめ置き内ふ飯りて之を報知し同輩を誘ひ來り力をなもせて運び入るゝ彩り　其間をこしも勞をいを ふとかし

蟻のふるまひを見て勇氣を耐忍力を を出したる人ゝ話なり○昔一人の武將戰ひやぶを て一方をきをぬけ逃げのびしがたまゝ路の傍に壞をたる家なりきれで此内ふかくを敗軍のためふ力を落し茫

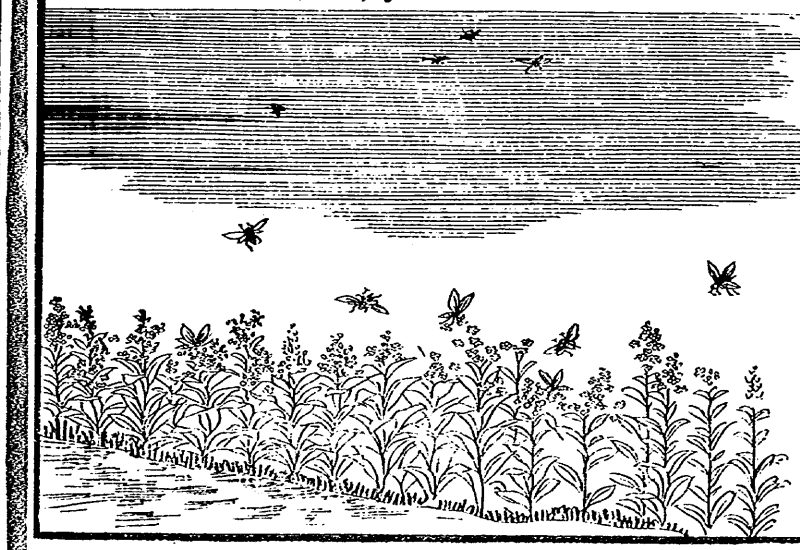
然として居たるあり　其時たまく一匹蟻ありり己の身をり大なる物を引きて高き壁上ゑ運ぶんとせ　武將ハ何心なく之を打ながめ居たりしが蟻ハ其物の重きがため遂に壁上をり墜るとも度々にして終ゑ六十九度ゑまで及ぶり　然るどもなほ倦ざる氣色なく七十度ゑして遂ゑ壁上ゑ曳きあげたり

之を見るより武將ハ忽ちさとりて謂へらく我ハ戰ゑ敗ぶたりとも唯一度ゑもぎぶ之を以て志ばくおもへば今此虫ハ所爲ゑ劣ぶりと是ゑ於て大に奮發して更ゑ勇氣を出ぶたりぶぞ

第四

蜜蜂の働く有樣ハ第一分業の仕方によぶ各受持をさだめ一匹たぶと雖も

むざに時間を過るものならば○一むきの蜂毎朝四組ゝ別き其一ゝ花粉を求えんがたゝゝ房を出で去りて遠く花園ゝとびめぐり又一ハ房内のほく



ろひゝ盡力一一ハ其腹内ゝ貯ふる所の蜜蠟を以て窩房ゝ基礎をかゝゝ一ゝゝろ〳〵の蜂の勞作ゝ奔走するものを見はゝをなゝと伏司る○此の如くして晝間ゝ暫くも間斷かく稼ぎ働きゝれもまた蟻と同一く食物を貯へて寒中の用意をゝるものなり

第五

人の業を營むまも分業ハ法によれバ勞をること少くして成ハ得ること多し

○若しそれ人間衣食住の事を皆一手にてかさば其煩と勞とに堪えざるべし　煩勞に堪えざるのみならず決して成効を見ること能ハらず○たとへバ漁師の一人にて網をうち且自ら船をハぐが如し此の如くせば終日海上をさまよふとも徒に勞するのみにて魚を獲ること能ハざるべし　兩人にてうりて一人ハ艪をとり一人ハ網をうたば必やその獲ものあらん

第六

穀物を作ること野菜ハ植ること農夫の事かり金鉄をきたひ又物ハ作ること鍛冶の職なり　織工にてうりて布帛を織り大工

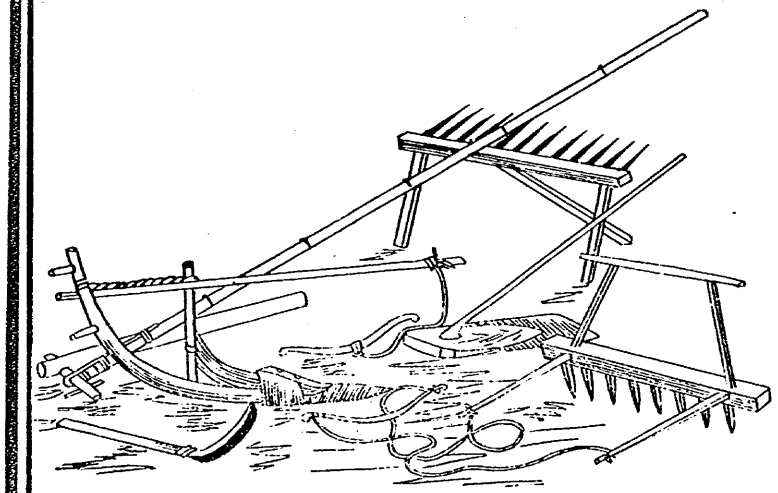
ゐりて家屋を建築
す○又家屋を造る
ものを大工ハ材木ゑ
以て家を組みたて
左官ハ泥土を合せ
て壁ゑ塗る石工ハ
石をきざみて土臺
を固む　其他裱裝

師ゐり疊刺ゐり皆夫〳〵の業ゑ分てり
○職業を大別すれバ農工商の三ハ外
ならず○農ハ一ハ百姓と稱へ田畑ゑ
耕し山林を繁殖せしめ畜類をかふ者
ゑ謂ふ　工ハ職人ものして大工左官仕
立屋板木師髪摘職ゑ類かり　商ハ農
夫及職人ゑ作り出せる品物ゑ賣買す
る者ものして米屋呉服店八百屋等是か

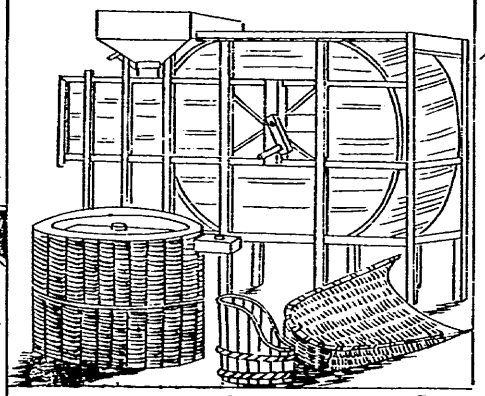
至

第六

農具ゝ土地の如何ゝよりて種々ゝ品物の至○農を營む者ハ便利かる農具ゝ用ゐるゝば勞少くして効多きゝれかれ



ば之を擇ぶと肝要ゝり○鋤鍬ゝ土砂ゝ起し坑をほり土塊をくゞゝに用ひ馬耙犂ハ牛馬ゝ輓かしめて田畑ゝ鋤き返し土塊ゝ搔きからにゝ用ゐ万能ハ草を搔き鎌ハ艸又ハ稻麥かゞゝ刈るゝ用ゐる



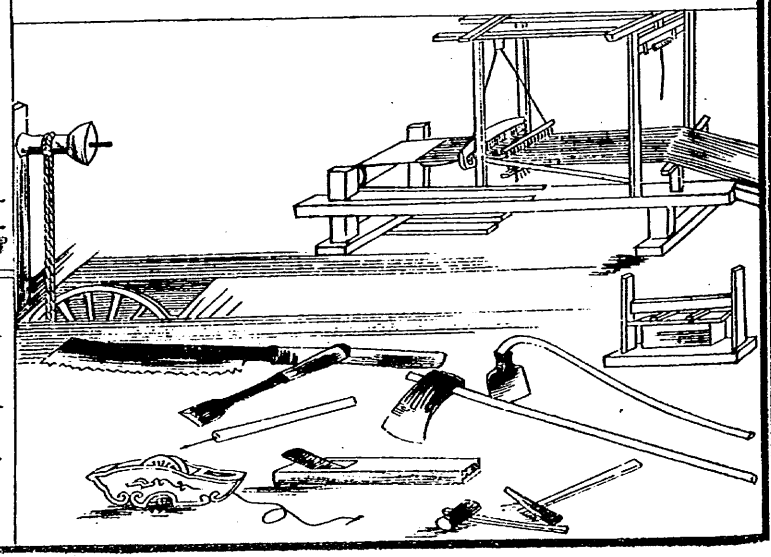
稻扱ゝ鉄或ハ竹

を以て製したる數多は長き齒ありり故
ふ千齒とも稱を稻麥玖はをみて穗を
ふぎ去る物かり○粃をとりて殼を去
るものを籜と云ひ車をまヨーて風を
生ど粃粃の輕きものと穀實は重き玖
のとを分つを翩斗と云ふ

第七

職工は道具をことに種類多し玆まを

唯其内のをもかる
數種を擧る而已○
木を伐り倒をもの
玖斧と云ひ之を荒
削りをるものを鉞
と云ふ　釿を以て
けづるたる材木又
ハ鋸を以て挽き割



至たる板かど玖滑まかをまハ鉋を用ゐる木玖穿つまハ大かるハ鑿にて至小かるハ錐あり○機ハ諸の端物を織る器まして筬杼、枠管等の附屬品にて至○其外轆轤、万力、鉄槌、墨縄、鑪、篦、刷毛等皆諸種の細工まハ用ゐる器械かり

第八

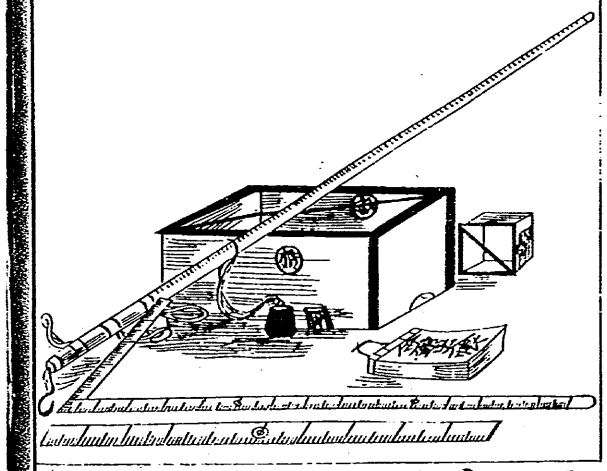
凡商人々誠實を以て客をまねくの看板とかすゐ　假初まも目前の利をむさぼらゞ正直を本として物品ゆ精粗善惡眞贋を明まにすることを肝要ゐり○こゝ商家まして貪慾の心玖生ドみだりに懸直を付し或ハ贋物をうまをけ素人の目をかをめ不當の利益をほしひまゝにをるときは假令一時々僥倖ホよりて小利を得るとにのるを忽世

人の惡評ゑうけ再び來り求むる客なかるべし　又同し中間ゑ於ても自然に取引ゑ疎んじ終ゑ身代ゑ失ふゑ至るべし　万一の僥倖ゑ目ゑのてゑして一時の高利を貪らんゑ至ゑ寧ろ購客ゑ信用を目的ゑして少しづゝの利分をゑむゑ若かざるゑり○諺ゑ曰蘆ゑもりて岡をなゑと信用ゑほくして購客多ゑれゑ小利と雖ゑ積りくて終ゑ大利とかるゑのゑり

第九

商業ニ必用ナルモノハ尺度斗量權衡ナリ此三ノ物正シカラザレバ人ノ信用ヲ失フ　又帳簿ハ主人ニカハリテ品物ノ見張ヲナシ取引ノ混雜ヲ明ニシ他日ノ紛紜ヲ裁判スルノ効アルモ

ノナレバ常ニ明細ニ記シ置クベシ○尺ニハ曲尺鯨尺ノ二種アリ曲尺ノ一尺ハ鯨尺ノ八寸ニ當レリ○端物ヲハカルニハ鯨尺ヲ用井其他ノ物ノ長短ヲ度ルニハ曲尺ヲ用井ル端物ハ概子



二丈八尺ヲ一端ト稱ヘ二端ヲ一匹ト稱フ　陸地ノ里程ヲハカルニハ六尺ヲ一間トシ六十間ヲ一町トス一里ハ三十六町ナリ　海上ノ一里ハ十四町四十三間一尺ニシテ之ヲ一哩ト稱フ○田畑山林宅地等ノ面積ヲ測ルニハ六尺四方ヲ一坪又ハ一歩トイフ　一畝ハ三十歩ニシテ一段ハ十畝一町ハ

十段ナリ故ニ一段ハ三百坪ニシテ一町ハ三千坪ナルコトヲ知ルベシ

第十

衣服ハ人ノ體ニキル物ノ總稱ニシテ時候ノ寒暖ニシタガヒテ樣々ノ名稱區別アリ○夏ハ帷子單衣ヲ着テ暑ヲシノギ冬ハ袷綿入ヲ着テ寒ヲフセグ春秋ノ候ニハ袷或ハ單衣ヲ適用ス○凡衣服ノ料ハ絹布、麻布及木綿、毛織物等ナリ　此中最身ヲアタヽムルニ宜シキモノハ毛織物ニシテ木綿之ニ次ギ絹ハ又其次ナリ　然レドモ軟カナルコトハ絹ニ若クハナク垢ツカザルヿハ毛布ニ若クハ莫シ　麻布ハ荒クシテ軟カナラズ又温カナラズ○綿布ハ木綿ヲツムギテ織リ麻布ハ麻ノ皮

ヲ製シテ織ル蚕ノ繭ヨリ取リタル糸ニテ織リタルヲ絹布ト云ヒ獸ノ毛ヲ以テ織リタルヲ毛織物トイフ○我邦ニハ木綿、麻布及ビ絹布ハ多ク之ヲ産スレドモ毛布ハ甚少ク多クハ之ヲ西洋ヨリ輸入ス

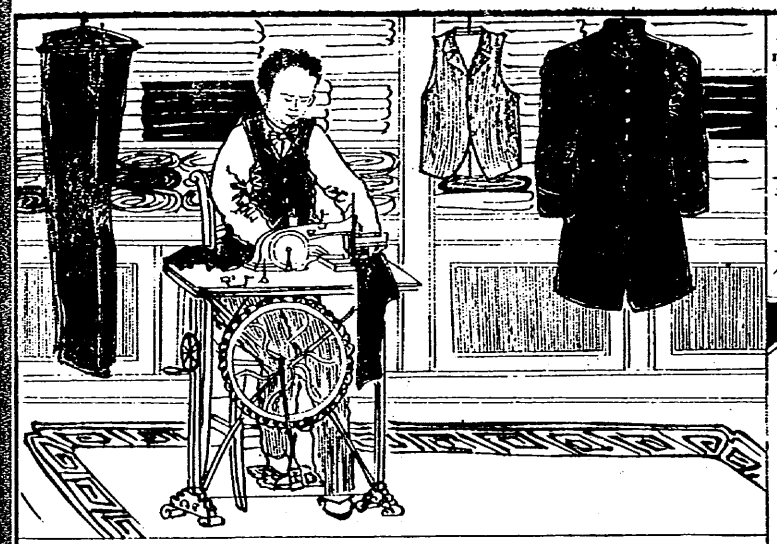
都テ衣服ハコトサラニ美麗ニカザルヲ貴バズ淨潔ニシテ汚レザルヲ良トス又色、模様、裁縫モ異様ナラザルヲ要ス○大抵衣服ノ模様、彩色ハ時ノ風俗ニシタガヒ青、黄、赤、白、黑ノ色ヲモトトシ其調合ノ加減ニヨリテ淡濃ノ色ヲ出スナリ○

今我邦ノ紺屋ニ用フル染色ノ名

ハ紫欝金紺淺黄桃色茶色藍鼠等ナリ○縞模様ニハ縦縞横縞碁盤縞置形小紋鹿子絞或ハ絣友仙染等ノ稱アリ○染料ハ多ク藍玉ヲ用ヰ其外紅茜蘇枋樹皮等ナリ○夏服ニハ白キヲ用ヰ冬服ニハ黒又ハ紺色ヲ用ヰルヲヨシトス　黒色ハ大陽ノ熱ヲ吸トルガ故ニアタヽカナリ白色ハ熱ヲ吸收セザルヲ以テ涼シキモノナリ

第十一

裁縫ノ仕方ニ種々アリ洋服ハ近年西洋ヨリ傳ハリタルモノニテ學校諸役所ナドノ如ク椅子ヲ用フル所或ハ製造場ノ如キ足ヲカヾメテ坐スルコトナキ處ニ於テハ便利ナルモノ也　殊ニ手足ノハタラキヲ要スル事業ヲナ



スニハ最適當ノ製ナリ○カラダノ上部ニ着ルヲ「マンテル」ト云ヒ胴ニ衣ルヲ「チヨッキ」トイヒ兩脚ニ着ルヲ「ズボン」ト云フ　此等ハ羅紗其他毛織物ノ類ヲ以テ裁縫ス○和服ノ仕立方ニハ本裁半裁アリ是ハオホムネ女子ノ仕事トス○衣服ヲ縫フベキ絲ハ木綿絲ト絹絲トアリ絹絲ハ木綿絲ヨリ細クシテ強シ

日本ノ服製ニハ長衣ノ外ニ袴、羽織、襦袢、股引、帶、脚半、足袋等アリ○袴ハ體ノ下部ニツケ羽織ハ上部ニ着ク○今ハ

洋製ノ服ヲ以テ禮服トスレドモ間ニハ羽織ト袴ヲ禮服ニ代用スルコトアリ　故ニ學校又ハ諸役所ニ出ルトキ或ハ葬式婚禮ナトノ儀式ニツラナル時ニハ禮服ヲ着ザレバ必羽織袴ヲ用ヰルヲ通例トス○

帶ハ諸種ノ織物ニテ作ル中ニモ筑前ノ博多織ハ帶ノ有名ナルモノニシテ極メテ上品ナリ○端物ハ太物、呉服ノ二類ニワカツ且大幅アリ並幅アリ

第十二

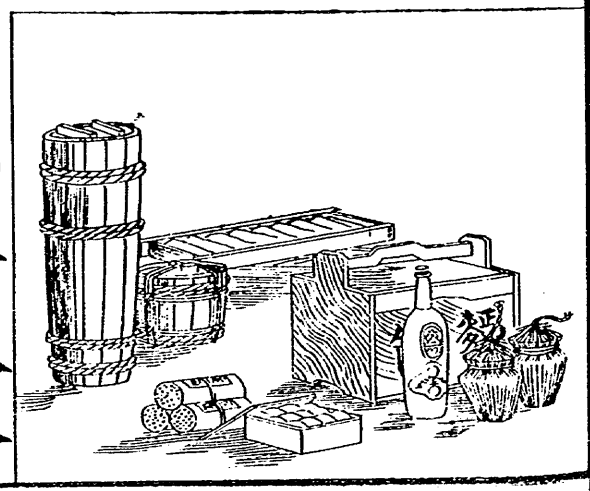
人ノ食用ニ供スベキ植物ハ種々アレ𪜈穀物ニ若クハナシ穀物ノ中ニテモ最貴キモノハ米、麥、豆、粟、黍ナリ之ヲ五

穀トイフ　此等ハ皆年々種ヲマキテ作ルナリ○米ハ水田ニ作リ其他ハ畑又ハ干田ニ作ル然レモ陸稻トトナヘ畑ニ作ル一種ノ稻アリ○五穀ノ中米ハ最効用多キモノニテ日常飲食ニ供スル爲メカシギテ飯トナシ或ハカモシテ酒トナスナド數フルニ暇アラズ○飯ニカシグモノヲ粳トイヒ餅ニツクモノヲ糯トイフ

麥ハ米ニツギテ要用ノモノナリ而シテ供用ノ種々ナルト滋養分ノ多キトハ却テ米ニ勝レリ○麥ニ大麥小麥裸

麥ノ種別アリ大麥ハ芽ヲハヤシ糯米ニ合セテ飴ヲ製シ或ハ麥酒（ビール）ヲカモスベシ　小麥ハ多ク粉トナシテ温飩、麪包、索麵、饅頭等ヲ作リ裸麥ハ飯ニ加ヘテ炊クベク又ムシテ麹トナスベシ○味噌、醤油ヲ製スルニハ大麥、小豆、裸麥共ニ要用ノモノナリ

大豆ハ味噌、醤油、豆腐ナドヲ作ルニ必用ナリ小豆ハ煎テ餡ヲ製スベシ　此外豌豆、蚕豆、大角豆等アレ



ドモ効用少シ

粟ニ夏粟、秋粟アリ土地ニヨリテハ米ニ混シカシギテ之ヲ常食トス○黍ハ全体ノカタチ粟ニ似テヤヽ大ナリ山間ノ

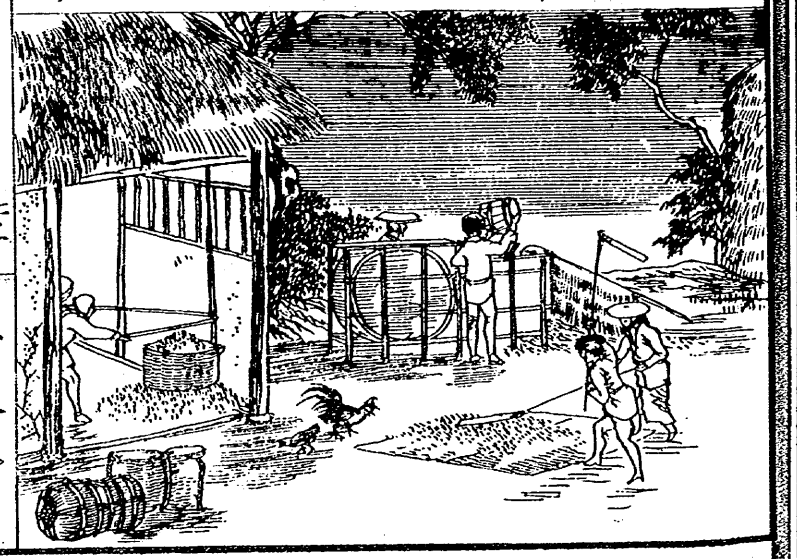
民ハ之ヲ常食トスル所アリ　蜀黍玉蜀黍モ亦同種類ニ屬ス○玉蜀黍ハ煑或ハアブリテ食フヲ常トス幼童ノ多ク好ムモノナリ稀ニハ常食トスル地方アリ

第十四

稻ノ作方ハ土地ノ氣候ト地味ノ差別ニヨリテ異ナレ𪜈大抵春ノ半ヲスグル頃種子ヲ苗代ニシキ長ジテ七八寸ニ至ル時之ヲ水田ニウツシ植ルナリ○植付モ亦土地ニヨリ少シノ遲速アレドモ大抵早稻ハ五月ノ末中稻ハ六月ノ初晩稻ハ六月

ノ半トス○苗ノ植付ヲオハリタル後ハ怠ラズ水ヲソヽギ肥ヲ施シ泥ヲカキ起シ又草ヲトル1四五度ニ至ル苗ハ漸ク長ズルニ從ヒテ數莖ノ蘖ヲ生ジ初秋ノ候ニ至リテ齊シク穗ヲ生ズ○稻ノ穗ニハ最小ナル白花ヲ開キ其花落チテ漸ク實ヲ結ビヤガテ晩秋ニ至レバ次第ニ淡黃色ヲヲビテ垂ル

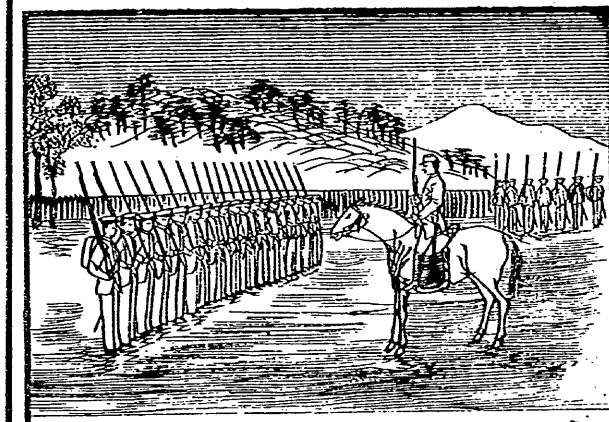
此稻ノ實ル時ナリ既ニ實レバ之ヲ刈リテ收ムソノ刈リタル稻ハ能クカハキタルヲ待テ穗ヲコギ落シ之ヲ日光ニサラスナリ然ル後礱ニテスリ



以テ殼ト粃トヲ去リ箕モテ簸リ或ハ翻斗ニテ吹キワケテ米トナス此米ヲ玄米ト云フ○玄米ハ運送ニ便ナルガタメ俵又ハ蓆囊ニツヽミテ藏ムルナリ○俵ニハ三斗五升入アリ四斗入アリ通例四斗ニシテ此ノ目方拾六貫目トス○玄米ヲ臼ニテ搗キ糠ヲ去リ能ク精ゲテ白米トナシ而シテ後始メテ炊キテ飯トナス○米ハ種子ヲ播シテ實ヲ収ムルニ至ルマデ農夫ノ辛苦此ノ如クナレバ古人モ粒々皆辛苦トハ云ヘリ之ヲ食スル毎ニ思ハザルベケンヤ

第十五

看ヨ操練場ニ數多ノ兵卒アリ皆鉄砲ヲカツギ劍ヲ帶ビ背囊ヲ負ヒテ能ク



隊列ヲトヽノヘ居レリ　此人々ハ君ノ爲メ國ノ爲メニ力ヲツクシ命ヲモ惜マヌ勇士ナリ○今ハ炎熱ノ候ナルモ斯クハゲミテ操練ヲナスハ他日軍ニノゾミテ能ク艱難ニタヘ手柄ヲナス樣身體ヲキタヘル所ナリ

○兵士トナリテ國ノタメニ力ヲ盡シ天皇陛下ノ厚キ御恩ニムクヒ奉ルハ一國人民タル者ノ務メナリ　汝等モ成長ノ後ハ彼人等ノ如クアツパレ勇マシキ軍人トナルコトヲ得ベケレバ今ヨリ勉強ノ間ニハ體操ヲナシテ身體ヲ健カニスベシ○假令兵士トナラザルモ身體健壯ナラザレバ何事ヲ

K20,8

モ成シ得ザルベシ故ニ體操ハ汝等ノ緊要ナル學科タリ○西洋ノ先哲「シラハ」曰健康ハ金銀財宝ニマサル余ハ健康ニ比較スベキ富貴アルヲ知ラズト宜ベナルカナ

小學新讀本卷之六終

明治二十年四月七日版權免許
同　年六月　刻成　定價金九錢

編輯人　福岡縣士族　笠間益三　福岡縣筑後國三池郡橋村七百二十五番地

出版人　東京府平民　杉本七百丸　東京日本橋區大傳馬町二丁目二十四番地